

くりうらくせんえん

## 栗生楽泉園・重監房資料館を訪問して

東京三会ハンセン病問題協議会議長 川上 詩朗 (48 期)

東京三会ハンセン病問題協議会は、2014年11月28日、草津町（群馬県）のハンセン病国立療養所栗生楽泉園の敷地内にある重監房資料館と重監房跡地の見学を行った。

重監房とは、ハンセン病患者を対象とした懲罰用の建物で、正式名称を「特別病室」という。しかし、「病室」とは名ばかりで、実際には患者への治療は行われず、「患者を重罰に処すための監房」として使用されていた。監房への収監は、正式な裁判を経ることなく、各療養所長に認められていた「懲戒検束権」（患者を処罰する権限）に基づき行われていた。重監房は1938（昭和13）年に建てられ、1947（昭和22）年まで使われていた。この間に、特に反抗的とされた延べ93名のハンセン病患者が収監され、そのうち23名が亡くなったと言われている（ハンセン病資料館ホームページ参照）。

当日は、東京三弁護士会から、職員含めて16名が参加した。重監房資料館では、最初にガイダンス用のビデオを観た。その後、資料館の職員の説明を受けながら、資料館内の見学をした。最初の見学は、再現された重監房（再現重監房）である。再現重監房の前で重監房の構造等に関するビデオを観たあと、再現重監房の中に入り疑似体験をした。重監房は厚いコンクリートの壁で覆われており、小さな窓からかろうじて明かりが入る状態である。便所は何の敷居もなく、小さな穴が一つあいているだけである。便器の深さも浅く、外に逃げるができない。電球の傘が一つ垂れ下がっているが、豆電球はついていない。薄っぺらな布団と毛布がそれぞれ一枚部屋に敷かれている。このような状況の下で、ドアが閉められ、明かりが消されると、部屋の中は真っ暗である。草津の冬は寒い。寒い時は布団が床に凍り付いている状態だという。そのような環境の下で真っ暗な部屋の中で何日も独りで閉じ込められることに恐怖を感じた。



重監房跡地

再現重監房見学の後は、収監者の方々の名前が刻まれたプレートや、発掘の際に出てきた南京錠やめがねや木製の欠けたお椀などの出土品や解説パネル等が展示されているのを見学した。証言映像のコーナーもある。

これらの展示を観ると、強制隔離政策の下での重大な人権侵害の酷さにあらためて胸が痛くなる。

重監房資料館見学後、資料館から少し離れた場所にある重監房の跡地を見学した。建物は壊されて、土台がむき出しの状態にある。現在、跡地見学のための整備を行っていた。

今回の見学は、現地見学が約3時間で、しかも日帰りという強行日程であったが、ハンセン病問題に対する理解を深めるうえで、大変充実したものであった。

ハンセン病問題協議会は、これまで回復者と弁護士が都内の中学校でハンセン病問題を通じて差別について考えるための出張授業を行ったり、東京都における無らい県運動の検証に向けた取組などを行っている。重監房資料館見学を通じて得たものを、今後の出張授業等で役立てていきたいと考えている。

### （参考）

国立ハンセン病資料館 <http://www.hansen-dis.jp/>  
重監房資料館 <http://sjpm.hansen-dis.jp/>

## シンポジウム「アフリカからの難民の現状と課題」

人権擁護委員会委員 鈴木 律文 (66 期)

2015年1月16日、クレオにおいて、標題のシンポジウムが開催された。これは、多くの弁護士がアフリカ諸国からの難民申請者に対する支援への第一歩を踏み出せるようにするため、アフリカの主要な難民発生国の実情を具体的に把握しつつ、難民認定ないし人道配慮を得るためのノウハウを学ぶことを目的としたものである。

シンポジウムは二部構成で、第一部では、立教大学特任准教授で元UNHCR職員の米川正子氏、認定NPO法人難民支援協会職員で法的支援を担当する田多晋氏、アフガン難民弁護団など長年難民支援に携わってきた児玉晃一弁護士（東京弁護士会）の3名の専門家にご講演いただいた。



第二部では、日本で難民として認定されたアンゴラ出身のFrancisco Saviera（フランシスコ・サヴィエラ）氏に当事者としてアフリカ難民の状況に関して発言をいただいた。総司会は人権擁護委員会国際人権部会の大川秀史会員、栗林美保会員が務めた。サヴィエラ氏のフランス語の通訳は、同部会の須田洋平会員が務めた。

第一部では、まず、米川氏から、「なぜ、アフリカ諸国は過去50年間、援助に依存し続けてきたのか」「アフリカには有能な政治家・リーダーはいるのか」「アフリカの国家は機能しているのか。文民を保護する能力がないのか」「紛争の目的とは」「国連機関、国連平和維持軍、NGO等の存在にもかかわらず、なぜ紛争が続くのか」といった問いを

聴衆に投げかけ、これに答える形で、難民が発生する構造についてお話しいただいた。難民・国内避難民キャンプに対する人道支援が紛争を生み出す仕組みとなっているとの話が興味深かった。

次に、米川氏の話を読まえて、田多氏から、難民支援協会に支援を求めるアフリカ諸国難民申請者の全体的な傾向とガーナ、ナイジェリア、カメルーンなど主な出身国について各国別の特徴についてご報告いただいた。ただし、便宜のために類型化はしたものの、一人一人事情は異なるので個々人のライフ・ストーリー、迫害に至る経緯を丁寧に聴取することが重要であると強調されたのが印象的であった。

そして、田多氏の話を引き継ぐ形で、児玉弁護士から、聴取した事実に対して適用する法、すなわち難民条約について、アフリカ難民事件で特に争点となることの多い3つ、迫害主体、ジェンダーを理由とする迫害、本質的変化論について条約解釈上のポイントについて解説いただいた。迫害主体は公権力に限られず、緩やかにそれも相当広く解することができるの話は、現在私は部族間の争いを理由とする難民事件を受任していることから、非常に役に立つものであった。

第二部では、サヴィエラ氏から、アフリカでは非民主主義的な独裁体制が各国を支配しており一握りの人間があらゆる権力を恣意的かつ絶対的に行使している。そして、それが援助を通じた欧米の保護によるものであり、欧米の彼らに対する「無処罰」が横行しているとの話があった。米川氏の話との一致に驚くとともに、サヴィエラ氏の知性に感銘を受けた。閉会後の「アフリカ難民を1人でも多く救って欲しい」との言葉には、弁護士として身の引き締まる思いがした。

## 公開学習会「学校現場におけるセクシュアル・マイノリティ」実施報告

両性の平等に関する委員会 セクシュアル・マイノリティPT

### 1 概要

2014年12月10日（18時～20時）弁護士会館にて、両性の平等に関する委員会セクシュアル・マイノリティ・プロジェクトチーム（以下「セクマイPT」という）は、学校現場において、LGBT（レズビアン、ゲイ、バイセクシュアル、トランスジェンダー）などのセクシュアル・マイノリティの子どもたちがどのような支援を必要としているのか、周りの大人たちには何ができるのかを考えるため、「知ろう 考えよう 学校現場におけるセクシュアル・マイノリティ～受け止めて、ありのままの子どもたち～」をテーマに、教員や保護者などの学校関係者を招いて公開学習会を開催した。前半は、トランスジェンダー当事者としての自らの体験をもとに、子どもたちの支援活動や教育関係者への研修活動に長年携わっている、「いのちリスペクト。ホワイトリボン・キャンペーン」共同代表の遠藤まめたさんに講演を行っていただき、後半は、委員と参加者を交え、参加者が日頃抱えている質問や問題点について意見交換会を行った。

年末の多忙な時期にもかかわらず、学生など、教育関係者または東弁会員以外の参加者も多く、出席者数（委員以外）は54名にものぼり、予想以上の盛況となった。

### 2 遠藤まめたさんの講演

講演では、学校現場におけるセクシュアル・マイノリティをテーマとし、多様な性の基礎知識、子どもたちの状況、大人にできることについてお話しいただいた。

多様な性の基礎知識においては、生物学的な性（からだの性）、性的指向（誰が好きか）、性自認（こころの性）といった「性」の構成要素について解説してもらい、性的指向と性自認の2つは別物で次元が異なる概念であることも説明いただいた。ゲイ・レズビアン（同性が好き）及びバ

イセクシュアル（同性異性のどちらも好き）は性的指向に関する概念であり、全人口の約3～5%であるとも言われている。この割合は、左利きの人口とほぼ同じである。また、男の身体として生まれたが女として生きたい、または女の身体として生まれたが男として生きたいという性同一性障害は、性自認に関する概念であり、数百人から数千人に1人の割合で存在する。

子どもたちの状況については、ゲイ・バイセクシュアル男性の65%が自殺を考え14%が自殺未遂を起こしており、50%はいじめ被害の経験があった。性同一性障害を有する子どもの4人に1人が不登校である。自身がセクシュアル・マイノリティであることを誰にも言えなかった割合は、女子で31%、男子で53%であった。セクシュアル・マイノリティ全体に共通して、子どもたちは非常に困難な状況に置かれやすいが、周囲の大人はセクシュアル・マイノリティの子どもを見過ごしてしまうことが多く、そのために子どもたちの困難は解消されずより深まるおそれがある。

大人にできることは、子どもからの相談前の対応では、セクシュアル・マイノリティであるかもしれないと自覚した子どもがそのことを言わなくても安心できる環境や、いざ言いたい気持ちになった場合に躊躇なく言い出せる環境をあらかじめつくっておくことである。例えば、学校内にセクシュアル・マイノリティに関する本やチラシをさりげなく置いたり、ポスターを張るなどして図書館や保健室を活用すること、授業の中でセクシュアル・マイノリティに対して肯定的な情報を生徒に伝えること、学校内でのセクシュアル・マイノリティに対する差別的なジョーク（いわゆる「ホモネタ・レズネタ」）を放置しないなどの対処が挙げられる。セクシュアル・マイノリティ当事者の生徒から実際に相談を受けた際の対応は一人一人異なるものの、「話してくれて、どうも

ありがとう」とカミングアウトしてくれたことに対してまずは感謝の意を表すと良い。そして、「どんな気持ち?」、「困っていることがあるの?」などと本人に対し受容的に訊いていくことが重要である。

参加者が公開学習会に参加した動機の中には、セクシュアル・マイノリティに関する知識を身に付けたい、理解を深めたい、当事者の生徒の気持ちを知りたいといったものもあり、上記講演は参加者にとって有意義なものであったはずである。

### 3 意見交換会

講演の後には、参加者から当日募った質問や日頃悩んでいる問題点について、委員と参加者が共に10人程度のグループごとに分かれ意見交換会を行った。挙げられた質問や問題点の一部としては、「学校で生徒からアンケートを取る際、男か女かをよく聞いているが、聞かないということも考えられるところ、どのような選択肢を設ければよいか」、「トランスジェンダーの子どもは服装はどうすべきか」、「LGBTのことも含んだ性教育の授業を昨年実施したが、他の生徒からLGBTを嫌悪する反応が授業中あり、その際どのように対処すべきであったか」等があった。

上記各質問や問題点の意見として、校内アンケートの性別記入欄に関しては、「これまでセクシュアル・マイノリティの存在を認識してなかったため何も意識せずに性別を聞いていたが傷つく生徒もいるため、性別を聞く必要のない時は聞かないようにしたり、性別を答えないという選択肢も設けた方がいいのでは」といったものが挙げられた。制服に関しては、「教師はトランスジェンダー当事者の生徒が周囲にカミングアウトしなくても、当該生徒が適切な服装を着用できるように配慮すべきである」といった意見が出た。

性教育中の生徒からの心無い言動への対処法については、「先生は『気持ち悪くない』と諭して教師がセクシュアル・マイノリティに肯定的である姿勢を示したり、同性愛については『誰を好きになるか』を他人と比べる必要はないことを教えた」といった手法が参加者から紹介された。

教員を中心として日頃から学校現場におけるセクシュアル・マイノリティに関して疑問や問題点を抱えている方は多く、終了時間まで活発な意見交換がなされた。セクマイPTとしては、学校関係者から現に悩んでいることや現場の状況を把握することができた。学校現場におけるセクシュアル・マイノリティについて話し合える場はまだ多いとはいえないところ、今回の意見交換会は委員だけでなく参加者にとっても貴重な機会であったと思われる。

### 4 総括

学校現場におけるセクシュアル・マイノリティの子どもに対する支援は現時点では決して十分とはいえないが、当事者である子どもの存在を意識することで、これまで見過ごされてきた点が問題として認識されるようになり、セクシュアル・マイノリティに対する学校関係者の意識が高まっている状況が確認された。しかしながら、学校関係者も適切な対応方法をまだ十分に確立できておらず、引き続き問題点を共有し検討していくことが必要であると実感した。

公開学習後参加者に記入いただいたアンケート結果では、講演及び意見交換会共にほとんど全員から好意的な評価をいただいた。今回のような機会の場を継続して設けてほしいとの要望もあり、セクマイPTとしては、今後も引き続き学校現場も含めたセクシュアル・マイノリティの方々に対する支援に取り組んでいく所存である。

## 2015 年度 東弁役員選挙

次期会長に伊藤茂昭会員，副会長は下記の6名が当選

2015年度東弁会長，副会長，監事，常議員及び日弁連代議員の選挙が1月26日に公示され，2月6日に投票が行われた。

会長，副会長は選挙が行われた。また，監事，常議員及び日弁連代議員は定員を超えず無投票となった。



2015年度新執行部

### 東弁役員選挙結果

**【会長】** 当選 伊藤 茂昭 (32期) 3665票  
投票 次点 武内 更一 (38期) 758票  
投票率61.09% 有権者数7428人

**【副会長】** 当選 湊 信明 (50期) 909票  
投票 当選 大森 夏織 (44期) 795票  
得票順 当選 渡辺 彰敏 (44期) 718票  
当選 森 徹 (41期) 635票  
当選 佐藤 貴則 (42期) 593票  
当選 中嶋 公雄 (45期) 522票  
次点 赤瀬 康明 (64期) 305票  
投票率61.13% 有権者数7428人

**【監事】** 鹿野 真美 (53期)  
無投票当選 吉村 誠 (47期)  
届出順

※常議員，日弁連代議員氏名はLIBRA4月号に掲載予定